

スワヒリ世界の歴史と展開

—東アフリカにおけるスワヒリ 化の地域的展開とその機能

日 野 舜 也

アフリカの主要作物にはバナナ、ヤムイモ、タロイモ、ヤシ類がある。これはいまから2千年前くらいの古い時代に東南アジアから伝来したものだ。ソルガムのような貧しい主食しかなかったアフリカが、東南アジアとの接触によって非常に豊かになった経緯がある。東南アジアとアフリカは昔から様々な深い関係があった。今日は東アフリカの植民地時代以前にできた都市的文化である「スワヒリ文化」を中心に話を進めるが、スワヒリ文化自体が汎インド洋交易の展開の中で成立してきた点では、東南アジアとも色々な形で関係があったと思われる。

スワヒリ文化の「スワヒリ」とは、アラビア語の「サーヘル」の複数形「スワヒル」を語源としている。古い時代から東アフリカの海岸部をアラビア語で指した外からの呼称で、アフリカから自称として出てきたものではない。紀元前後から、東アフリカ海岸部に交易の港町が形成されてきた記録がある。インド洋を通しての、アラブ、インド、東南アジア、中国まで含めた交易の発達が始まった頃と時期を共にしている。それ以前にも、ヤムイモ等の作物がアフリカに取り込まれているように、マダガスカルへ東南アジア系の人々が来ていたことは推察されるが、スワヒリの形成という意味から言えば、この記録の頃から15世紀末のポルトガル進出までが「スワヒリ形成期」と考えられるだろう。

この時期、汎インド洋交易の展開に伴い、多くのアジア人移住民や来住商人達がこの地域にきている。インド洋には北からのモンスーンと南からのモンスーンが交互に吹く。これを利用して、東アフリカにオマーン、イエメン、イランのシラジ等から多くの船が訪れ、風が変わるまでの数カ月間はここに滞在し商売をする。船乗り達は現地妻を手に入れ、その間に生まれた混血民を中心に新しい社会が展開することとなった。それは東アフリカの海岸部に限られた、交易港中心の社会である。そこにスワヒリ文化が形成され、7世紀のイスラームの進展と共に、あるいはイスラームの異端とされた人々の亡命によってイスラーム化が伴ってくる。

基本的にはアフリカ原住民であるバントゥの母なる文化と、父親が持ち込んだアラブやアジア系の文化が結びつき、アフロ・アジア的な混合文化がここに成立した。それはスワヒリ語という言葉に端的に示されている。バントゥの語彙や文法の上に、アラビアを中心にしたアジア文化が乗る形で成立した言葉である。基礎語彙である天然現象、親族名称、動物の名前、身体名称の外側に見える部分等は、バントゥ起源の言葉が中心になる。それに対して抽象名詞や、

物質文化の言葉、挨拶の言葉、宗教語の中にアラブ起源の言葉が多い。自然の中で作られてきたバントゥの語彙や文法を母親から習い、父親が持ち込んできた様々な事物の語彙が乗る形で形成されてたのだろう。この言葉の面に端的に示されるように、様々な事象も母なるバントゥの文化と父なるアジアの文化の結合によってスワヒリ文化が成立している。

イブン・バットゥータの旅行記の記述からも窺えるように、キルワやモガディシオなど、15世紀末頃には既に都市的な港町が発達していた。12、13世紀がその最盛期で、とくにキルワは、ジンバブウェ・モノモタパ王朝から出てきた金の交易の独占権を握り、非常に大きな経済力を持ち始める。ところが15世紀末、バスコ・ダ・ガマが希望峰を廻って東インドへの航路を開き、この地域はポルトガルの制海権の下に置かれ、従来のような頻繁なアラブとの文化接触は制限されることになった。ポルトガル勢力下にあった約300年間は、スワヒリ文化が土着化し、より強くバントゥ的な要素を深めていくことになる。私はこの時期を「スワヒリ文化の定着期」と呼んでいる。

その後、ヨーロッパにおけるポルトガルの勢力が相対的に弱まり、18世紀の後半からオスマントルコ軍、アラビア半島からの反攻、モンバサのレジスタンス等が起こり始めると同時に、ポルトガルの勢力は相対的に弱まり、逆にイギリスやアメリカが勢力を強めてくる。インドの商業資本と結びついたマスカット・オマーンのブサイディ王朝が、イギリスの後ろだてを受けて東アフリカ海岸部に下りてくる。19世紀初頭にはポルトガルを南のモザンビークに追い払い、現在のザンジバルを首都にしたブサイディ王朝が東アフリカの沿岸部を支配した。背後からイギリスが糸を引く形で、ブサイディ王朝の支配は70～80年間続き、その後の植民地化につながっていく。

この時期を私は「スワヒリの拡大期」と名付けている。その前期がオマーン時代、後期が植民地時代になる。海岸部に局限されていたスワヒリ文化は内陸に拡大していった。それまでの交易は、内陸のニャムウェジ、カンバ、ヤオ等のグループが運ぶ交易品(象牙、奴隷、金など)を海岸で待ち受けて買い取っていた。だが、この頃からアラブ商人やスワヒリ商人達が、自分でキャラバンを組み内陸へ入っていくようになる。ザンジバルのクロブ・プランテーションの発達で、集中的な労働力を必要としたことや、ヨーロッパの産業革命後の経済的な富裕化の中で、象牙等の奢侈品の需要が急増してきた。いままでのように商品を待ち受けているだけでは足りず、自ら内陸に入って集めてくるようになる。

そのルートは、ザンジバルの対岸のバガモヨから、ゴゴランド、タボラ、タンガニイカ湖畔のウジジを通り、そこから船で対岸に渡り、現在のザイール東部の森林部マニエマ地方に入っ

マレー系海洋民東アフリカ沿岸・マダガスカルに到達	
(ヤマイモ、バナナ、ココヤシ、マンゴーなど東南アジア栽培植物の伝来)	
BC	東アフリカ沿岸都市の成立(Peloplus of Brythrean Sea)
AD	Ptolemy(90-165 AD)
	ムハンマドイスラム教おこす(622)
700	ス 東アフリカ沿岸部にイスラム教到達
	ワ バテ、ラム、モンバサ、キルワの建設(Pate Chronicle)
1000	ヒ ベルシャシュラージ移民の到達 ジンバブウェ、モノモバタ王朝おこる
	AI MASUDI の記録
1200	リ このころキルワなど沿岸交易都市の最盛期
1400	形 Ibn BATTUTA 旅行記
	成 明の鄭和、東アフリカに到達(1407)
	期 マリンディ、明朝永楽亭に麒麟献上(1405)
1500	バスコダガマ東アフリカの到達、インドにむかう(1498)
	東アフリカ沿岸部のポルトガル支配にはじまる
	キルワの衰亡(1587)
1600	ス モノモバタの衰亡
	ワ
1700	ヒ Yusuf Bin-HASSANの反乱(モンバサ、1631)
	期 AI-MAZRUI モンバサ奪回
1800	ス ポルトガル勢力、南へしりぞく
	ワ Sayid SAYYIDによるザンジバルスルタン国成立
	期 アラブ・スワヒリ交易の内陸進出(スワヒリ文化の内陸浸透)
1900	期 植民地化にはじまる(スワヒリ文化の内陸拡大)

図1 スワヒリ化関連年表

		歴 史	トポロジィ	住 民	社 会	文 化
スワヒリ形成期 (1～15C)		東アフリカ沿岸 交易はじまる バンツール沿岸 部に到達 -622-ヘジラ 沿岸民のイスラ ム化はじまる 沿岸都市のシュ ラージ体制確立	沿岸 セツルメン ト	アラブシュラ ージとバンツールの 混血はじまる	アラブシュラ ージ混血民 バンツール民の混 住コミュニティ	バンツール文化のアラブ化による スワヒリ文化の形成 バンツールの農耕、文法、母系制 アラブのイスラーム、物質文化、 語彙
スワヒリ定着期 (16～17C)		ポルトガル支配 ニヤムウェジ・ ヤオの交易ルー トひらける	沿岸 セツルメン ト	混血バンツール民 としてのスワヒ リ住民	人種集団としての スワヒリ集団 成立	スワヒリ文化の土着化によるス ワヒリの文化複合 イスラーム教 スワヒリ語 都市的生活
ス ワ ヒ リ	オーマン 時代 (18～19C)	ポルトガル勢力 の駆逐 マズリイ支配 オーマンガンジ バル王国 アラブ・スワヒ リの内陸進出	交易ルート にのった地 域的拡大 内陸のセツ ルメント	脱部族的バンツ ールのスワヒリ化 ポーター 交易のセツル メント周辺 バンツール民ド レイ	内陸セツルメン ト集落の成立 内陸スワヒリ民 の定住による集 落の都市化	内陸バンツール民のスワヒリ化・ スワヒリ語の拡大
拡 大 期	ヨーロoppa 植民地時代 (20C)	植民地体制の確 立	非イスラーム 地域への 拡大	脱部族的バンツ ールのスワヒリ化 開拓農民 商人 職人	資本主義体制下 における地域社 会内のサービス センター 開拓社会	スワヒリ語の普及 脱部族現象

図2 東アフリカにおけるスワヒリ化の歴史的展開概念図

て行く。そこで奴隷を捕まえ、買い集めた象牙を奴隷に担がせて海岸まで運び出す。象牙はヨーロッパへ運ばれ、奴隷は、ザンジバルのプランテーションで使い後は売り払う。このようなルートの他にも、タボラから北上し、ウガンダ王朝へと向かうルート、あるいはバガモヨよりも南のキルワからマラウイ湖、ザンビアを通り、ザイール南部のカタンガ州に入っていくルートも開けてくる。

私が1964年からフィールドワークをしたタンガニイカ湖畔の町ウジジは、交易ルートの大きな拠点である。ここは1972年に、行方不明になっていたリビングストーンをスタンレーが発見したことで有名だが、拡大期にはアラブのセツルメントができ、その近辺に市場が開かれ始めた。周辺の人達が色々な作物や漁獲物を売りに来る。1770年の後半に再びウジジを訪ねたスタンレーの記録は、現在のウジジの市場の基本的な構成とあまり変わらない。

ウジジの市場周辺にもいくつかのグループが集まってきた。奴隷として連れられこの地域に住み着いたマニエマ人、コンゴ系の漁業民達、以前から住んでいた牛を持ったジジ農耕民、その中からウジジという都市に色々な形で結びつく人々が出てくる。彼らは海岸からきたアラブ人よりも、むしろ自分達とあまり色の違わないスワヒリの洗練された商人達を眺め、一種の憧れを持ったに違いない。特に奴隷民であったマニエマ系の人々は、イスラームに改宗すれば早く解放されることもあった。海岸のスワヒリ商人達を真似し、イスラーム教徒に改宗していく。異なる部族から出てきた人達が、ウジジの市民として「我々スワヒリ」という意識を持つようになった。現在でも、ウジジは80ぐらいの異なる部族の出身者から構成されているが、その中核にあるイスラーム教徒達は基本的に「我々スワヒリ」という意識を共有している。ただ、その意識がそれぞれの部族帰属意識を超えるかどうかはわからない。少なくとも東アフリカでは、異なる部族の出身者が集まった集落でイスラーム教徒となった人々の間には、「我々スワヒリ」という共通意識が持たれていると言えるだろう。

東アフリカにおけるアラブの内陸交易ルートとイスラーム分布は、基本的にかなり一致している。さらにスワヒリの都市が、植民地時代以前に既に内陸のアラブ交易ルートに沿った形で発達を始めていた。これが東アフリカの都市文化の一つの基本と考えられるだろう。アラブ商人、スワヒリ商人の内陸浸透により、スワヒリ文化が内陸に拡大したが、この時期はアラブの交易ルートに沿った線的な展開だった。ところが植民地時代になってさらに、スワヒリ文化が内陸のもっと広い地域に拡大していく。皮肉にも植民地政策がスワヒリ文化を拡大させる要因となっている。植民地政府が最初にこの植民地を経営する場合、現地のイスラーム教徒達を自分の手先として雇った。道先案内人、あるいは農園での通訳、労働監督者、徴税請負人、この他

に労働力を集めにいくことも、スワヒリ商人やアラブ商人を起用している。植民地の進展と共に発達してきた都市には、大勢のイスラム教徒達が住み着き、植民地地域全体にわたってスワヒリ文化が拡大していくことになる。

特にタンザニアは、ザンジバルと内陸のタンガニイカが併合する形で1964年に発足した国で、タンガニイカの部分はかつてはドイツの植民地だった。他のフランスやイギリスの植民地では、フランス語や英語の使用を強制したが、ここではむしろスワヒリ語を広げることを奨励し、ある時期からは辞書や教科書も出てくる。スワヒリ文化の基本的な構成要素であるスワヒリ語を通じて、スワヒリ文化は植民地時代に内陸に広がっていった。

さらに内陸のスワヒリ都市が植民地における貨幣経済によって発展していく。例えばウジジで捕れるダガーという魚が、ザンビアの鉱山地帯や、タンザニア、ケニアの内陸の多くのプランテーションで、非常に安い蛋白源として使われるようになる。もちろんその背景には1914年に鉄道が敷かれ、輸送力が増したことも関係するだろう。このようにして内陸のスワヒリ都市が発達すると同時に、植民地時代にはヨーロッパ植民地文化が内陸にも拡大していくことになる。

東アフリカの場合、スワヒリ文化が沿岸部から内陸に拡大し、それを追いかける形で植民地文化が再度海岸部から広がっていく。ザンジバルはスワヒリ文化の最初の先進的な地域であると共に、植民地文化の先進的な地域でもある。西アフリカでは、イスラーム化は北から起こり、ヨーロッパ化は南の海岸部から起きたという、文化接触の特性に違いが見られる。

東アフリカの内陸部に拡大したスワヒリ文化は、その結果として4つの社会の類型を形成した。沿岸部スワヒリマジョリティ地域。タボラ、ウジジのような内陸部スワヒリマジョリティ地域。そしてスクマやニャムウェジ、その他の早い時期から内陸からの交易を担っていたグループから成立した、伝統的な部族社会のイスラーム化によるスワヒリマイノリティ地域。もう一つは全くイスラーム教が入らなかったマサイのような内陸のノンイスラーム地域である。

東アフリカ沿岸部で形成されたスワヒリ文化には、5つの構成要素を挙げることができる。一つには人種的特性がある。スワヒリ文化を形成し、拡大させていく担い手としてのアフロ・アジア的な混血民である。海岸に住む混血民達も、19世紀からはアラブ商人とともに、キャラバンルートに沿って内陸に出かけるようになった。二番目は都市性が考えられる。海岸でスワヒリ文化が発達した場所は基本的に港の都市であり、スワヒリ文化の形成、拡大の場の社会的特性になる。三番目にはイスラーム教がある。7世紀にできたイスラーム教に加わる形ではあったが、スワヒリ文化を規定する内面的な要素となる。宗教、信仰、法の体系、価値体系が

この中に入る。四番目にスワヒリ的生活様式がある。これはスワヒリ文化を規定する外面的要素であり、例えば挨拶の仕方や衣食住、技術などの特性ということになる。衣はもちろんイスラーム帽にカンズという白い服で、女性はカンガを巻く。食は、伝統的なウガリという練り粥に対して、米も食べるようになる。住ではアフリカの伝統的な丸い家に対し、四角い長方形の家が建てられていく。そして最後に、言葉の特性としてスワヒリ語がある。スワヒリ語は海岸部で発達し、内陸部に交易の言葉として広がっていった。スワヒリ文化を保持し伝達する手段的装置である。この五つがスワヒリ文化の基本的な構成要素として考えられ、最も内面的な人種的特性から、外に広く拡大する可能性のあるスワヒリ語までのレベルが考えられる。

1968年に書いた私の論文では、この五つの構成要素がスワヒリ文化の拡大によって一つ一つ落ちていくことを提言した。東アフリカの海岸部ではこの五つが揃わないとスワヒリではない。だがウジジの人々は「我々スワヒリ」という共通意識を持ちながら、混血民ではなく様々な内陸部の部族出身者達で構成されている。ただ、都市に住むイスラーム教徒で、スワヒリ的な生活様式を営み、スワヒリ語を自分の母語のようにしている。

もっと内陸のマングーラは、植民地時代に計画的に農地化され、公募によって人を集める形で成立した開拓社会である。様々に異なる部族出身者達が集まり、一つの開拓社会を形成している。その多くは都市経験のあるイスラームマイノリティ地域からの出身である。彼らが持った共通意識も「我々スワヒリ」だが、このスワヒリには二つのレベルがある。周辺の牧畜民、半農半牧民、狩猟採集民との関わりの中では、農耕開拓民としての「スワヒリ」という意識であり、その中にはキリスト教徒も含まれている。ところが、特に彼らの中のイスラーム教徒が「我々スワヒリ」という時には、クリスチャンを除いたイスラーム教徒だけの「スワヒリ」という意識として持たれている。つまり、包括的なスワヒリ意識と限定的なスワヒリ意識という二重性がある。マングーラにおいては人種的特性だけでなく、都市性という構成要素も抜け落ちる。イスラーム教徒、スワヒリ的生活様式、スワヒリ語を喋ることがスワヒリの条件となるが、更にその中の特定の人々はキリスト教徒もスワヒリに含まれ、イスラーム教の要素も落ちてしまう。

ではノンイスラーム地域ではどうだろう。マサイの集落でタンザニア政府の役人達が演説する時は、マサイ語ではなくスワヒリ語で喋るのだが、多くはネクタイを締めて、背広を着ている人達だ。マサイから見れば、彼らはスワヒリ語を喋る「スワヒリ」である。スワヒリ語さえ話せれば「スワヒリ」ということになってしまう。スワヒリ文化の歴史的に作られた構成要素が、地域的拡大、時代的な移行の中で、一つ一つが欠落していくことになる。

西欧植民地化についても、スワヒリ化と同じような現象がある。スワヒリ化の過程、植民地化の過程を考えた時に、文化の五つの構成要素は、文化接触の過程ではある種の方法論的な意味を持つのではないか。文化接触におけるセオリーを考えてみた。

まず、個々のエスニック集団がある。その集団の血縁意識で基礎的に作られる人種的特性がある。地域的な特性としての地縁性、つまり彼らの集団がおかれた自然的文化的環境特性に規定されつつ、歴史的に作られてきた諸特性、特に牧畜民、農耕民という生産特性が関わってくる。エスニック集団文化を規定する内面的要素としては、個々の部族が持つ宗教、価値体系、信念体系、法というものがある。エスニックな集団文化を規定する外面的な要素としては、彼らの生活様式、衣食住、行動様式、技術、物質文化等がある。そして最後に集団文化を保持し伝達する手段的装置としての言語が考えられる。

このような伝統的な社会が異なる文化と接触した場合を、私の経験から述べておきたい。一つの伝統的な社会に支えられてきたトングウェ語を例に紹介してみよう。スワヒリ文化との接触によって最初に起こるのは、スワヒリ語とトングウェ語をバイリンガルに話すようになることだ。家ではトングウェ語を喋り、町に出ればスワヒリ語を喋るという使い分けがなされる。その次に、スワヒリ的な服装が取り入れられ、祝日には米を食べるような食習慣の使い分けが出てくる。更にスワヒリ化が進むと、その中から特に都市と関わりを持つ人々の多くがイスラーム教に改宗することになる。スワヒリ文化を身につけイスラーム教徒に改宗した人は、都市に移り住んでも、それほど大きな違和感がない。ただし人種的特性だけは消すことはできないという状況である。

植民地文化との接触でも同じように考えられる。東アフリカではスワヒリ文化の内陸拡大とほぼ同じルートを通して、その後の植民地文化も拡大していった。植民地(西欧)文化でも五つの構成要素から考えれば、植民地文化を保持し伝達する手段的要素、植民地共通語としては、東アフリカの場合には英語となる。植民地文化を規定する外面的要素は西欧的な生活様式、行動様式、衣食住、技術、物質文化で、内面的要素としては、キリスト教、西欧的価値体系、植民地法などが入る。そして植民地文化は都市づたいに拡大しており、やはり都市性という要素が入り、最後には人種的特性としてのヨーロッパ人が挙げられるが、これもやはり接触しえない要素として残ることになる。

現実には東アフリカの地域では、まず外側の三要素が重なってきた。多くの人が部族語、スワヒリ語、英語をトライリンガルに話し、ウガリ、米の他にもパンやドーナツを食べようになる。服装も腰巻きからカンガ、更にそこに靴下や靴を履いたり、カンズの上に背広のコート

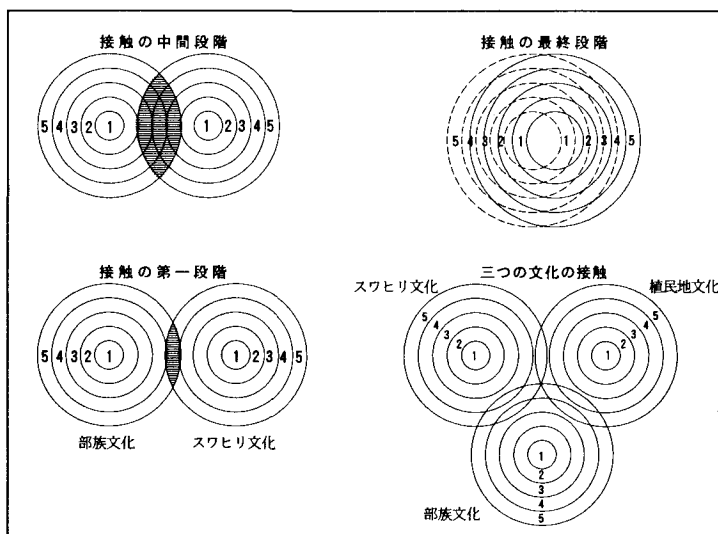


図3 東アフリカにおける文化接触の概念的構造

を着るのが正式の服装になる。さらにその次には、キリスト教とイスラーム教の衝突がある。東アフリカで特徴的なことの一つに、イスラーム教徒からキリスト教徒へ、あるいはキリスト教徒からイスラーム教徒への改宗が、我々が考えるよりもずっと容易に起こる。現在でも宗教運動は非常に盛んで、それぞれ勧誘の演説会を開けば、改宗する者が出てくる。また、イスラーム教徒であっても、普段の日常生活は西欧的な価値体系の中に身を置いている。モスクに行く時にはイスラームの服を着て行っても、役所へ行くときには背広にネクタイで出かけていく。イスラーム教徒であると共に、ヨーロッパ的な生活様式がごく普通に行われている。

都市文化としての観点から言えば、植民地の都市文化とスワヒリ的な都市文化は、多くの都市で新市街と旧市街という形で現れている。例えば植民地都市の典型であるケニアのナイロビでも、南の方にはイスラーム教徒達のコロニーができてくる。ダル・エス・サラームでも中心地域の非常に近代的な所があると同時に、マゴメニというイスラーム教徒達が住む地域も広がってくる。

文化接触の過程は、まずスワヒリ文化と部族文化が接触する。文化要素の周辺部から変化し、最初は部族語とスワヒリ語のバイリンガルから始まる。植民地文化との接触も同じように考えられる。東アフリカの異なる部族が集まった都市的文化の、一番の基礎的部分はスワヒリである。さらに植民地以後には国民社会の時代が到来し、アフリカの国の殆どが植民地時代の領土によって国境を規定され、その中での国家形成、国民社会形成が行われてきており、非常にアーティフィシャルな要素を持つことになる。

アフリカの伝統的な社会の特徴は、部族本位制社会である。アフリカの多くの人々は、基本的にそれぞれが属する部族を一つのインデックスにして、多部族共生の広域社会を作っている。一つの地域の中に多種多様な部族がいて、様々な接触はあるが、ある特定のグループを皆殺し

にすることは考えもしない。個々の集団として共生する社会である。私はさらに部族際社会ということを考えている。多くの部族が個々の特性を持ち、略奪や亡命あるいは平和理にメンバーの交換をし、あるいはそれぞれのグループの生産特性を通じての交易や情報交換等で、彼らの部族際社会が成立してきた。そこにスワヒリ化、植民地化が起こったのではない。

一方、植民地を基礎にして成立した国民社会は、全く伝統的な社会とは関係がなく形成される。マードックの部族の分布地図と、現在の国民社会の地図を重ねても、非常に多くのグループが二つ以上の植民地に分割されていたり、ナイジェリアのように約200もの異なる部族文化を抱えている国もある。この国民社会はある意味では植民地と同じように、アーティフィシアルな後から作り上げた社会である。多くの国が一党独裁制で、アフリカの社会主義やマルクス主義的な社会主義まで含めて、国民の自由な言動は許さない。特に個々の伝統的な部族社会が自分達の独自性を言い出せば、これは遅れたトライバリズムであるという形で弾圧の対象にする。これは植民地時代から起こってきたことであり、それは国民社会の中にも引き継がれていくことになる。

そこで各国はそれぞれに強いスローガンを持つことになる。東アフリカでも例外ではなく、特にタンザニアにおいては、ザンジバルというスワヒリ文化発祥の中心地と、内陸のスワヒリ文化が拡大された地域とで国を作ったこともあり、国民文化の基礎的な部分にスワヒリ文化が置かれている。タンザニアの国民文化を先程の五つの要素で考えてみると、人種的な特性は基本的にはアフリカ人である。だが、タンザニア国民社会形成に貢献するアジア人やヨーロッパ人との協調が言われ、国民社会形成に協力する者ならば、ヨーロッパ人でもアジア人でもいい。社会的特性としてはCCM(革命党)による一党制の政治体制で、貨幣経済体制を基礎にした自立的国民社会である。これにはトライバリズムの排斥も含まれてくる。国民社会を規定する内面的な要素としては、タンザニア的価値体系ということになる。1978年のアルーシャ宣言で、ニエレレが示したウジャマーという思想がある。これはアフリカの社会主義で、アフリカには伝統的に元々社会主義的な考え方、コミュニズムがあったとして、これを「ウジャマー」とした。そのウジャマー思想に基づく国民文化、あるいは国法や信仰等が考えられる。国民文化を規定する外面的要素としてのタンザニア的行動様式は、衣食住の習慣、技術、物質文化である。例えば人々が仲間をンドゥグ(同志)という呼び方で挨拶をしたり、背広に代えて、エリート達は詰め襟の服を採用する。そして国の基本的な教育語(国語)をスワヒリ語とし、国民文化を保持し、伝達する手段装置である。同時に国際語、第二の公用語として英語も使用されるが、基本的にはスワヒリ語を基礎とした国民文化がここに起こってくる。

タンザニアの国民文化のスローガンを見ると、非常にスワヒリ的な要素との関わりが深い。例えばトライバリズムを超えた一つの全体的な国民像も、かつての「スワヒリ」という共通意識をモデルにしてきたと考えられる。A A 研で「アフリカにおける都市化の比較研究」というプロジェクトがあり、そこで1989年に「スワヒリ化について」というシンポジウムを開いたことがある。この時の報告者に一致したことは、国民教育が住民にとっての「スワヒリ化」として捉えられることだった。行政活動の全てがスワヒリ語を基本としている。役所の掲示、ラジオ広報、選挙演説は全てスワヒリ語で行われ、成人に対する識字教育はもちろん、小学校から中学までの学校教育もスワヒリ語である。スワヒリ語による小説や劇画もゲリラ的と言えるほど数多く出版されるようになり、スワヒリ語の普及のバックグラウンドにあるスワヒリ文化がめざましく拡大してきている。

そこで面白い現象が起ってきている。タンザニアを始め、東アフリカの地域のスワヒリ語にはいくつかの方言があるが、ザンジバルの方言をスタンダードにすることが植民地時代に決められた。基本的にはスワヒリ語の文法や語彙の基礎として、ザンジバルの方言が使われ、タンザニアでもケニアでも教育語のスワヒリ語として規定された。ところが同時に、タンザニアやケニアという国が発達する中で、ヨーロッパ的な概念や科学用語をスワヒリ語に変換する必要が生じてくる。教育で使うタームのスワヒリ語化である。それが教育語の中に取り入れられると、元々スワヒリの標準語であったザンジバルで、教育語としてのスワヒリ語が理解できないという現象が起きてきた。ザンジバルではスワヒリ文化の再スワヒリ化が起っている。

このようにスワヒリ文化が東アフリカ内陸部をスワヒリ化していく過程、さらに植民地化、国民社会の形成の中で、内陸まで含んだ部族を超えた共通文化が、スワヒリ語という共通言語の機能も含めた形で東アフリカ全体を覆っている。個々の部族の帰属意識も本音としてありながら、同時に建て前としての国民意識には、スワヒリ文化を基礎にした共通性が見られるのではないか。そこにスワヒリ化の歴史的機能、地域的機能、社会的機能が見られるのではないだろうか。

参考文献

- 日野舜也, 1969, 「東アフリカにおけるスワヒリについて」・『アジア経済』10-2, pp. 4-28.
H I N O, S., 1974, "Swahili in East Africa", Seminar Paper, Institute of African Studies, University of Nairobi.
日野舜也, 1980, 「東アフリカにおけるスワヒリ認識の地域的構造」・『アフリカ社会の形成と

- 展開：地域・都市・言語』（富川盛道編）・173-226頁・同胞舎
- H I N O, S. 1980. 'Territorial Structure of the Swahili Concept and Social Function of Swahili Culture', "Senri Ethnological Studies" 6, pp. 93-124
- 日野舜也. 1984. 「アフリカでムスリムになること」・『イスラム世界の人々・1・総論』（三木 亘・日野舜也・上岡弘二・中野暁雄編）・117-147頁・東洋経済新報社
- 日野舜也. 1987. 「スワヒリ文化の形成と拡大」・『民族の世界史・黒人アフリカの歴史世界』（川田順造編）・250-273頁・山川出版社
- 日野舜也. 1988. 「部族本位制社会から国民社会へ：文化接触とアイデンティティの考察」・『民族とは何か』（川田順造・福井勝義編）・281-302頁・岩波書店
- H I N O, S. 1990. "Re-Swahilization of Swahili Culture : A Case Study of Zanzibar", Seminar Paper, Taasisi ya Kiswahili na Lugha za Kigeni, Zanzibar.
- H I N O, S. 1990. "Swahilization, Westernization and Nationalization in Tanzania", Seminar Paper, Institute of Kiswahili Research, University of Dar es Salaam.
- 日野舜也. 1990. 「アフリカにおけるイスラームとキリスト教：タンザニア国民社会をめぐるいくつかの事件から」・『イスラムの都市性研究報告』・80, 1-27頁
- H I N O, S. 1990. 'Swahilization, Westernization and Nationalization in Tanzania', "African Urban Studies", Vol. 1, pp. 1-26
- H I N O, S. 1992. 'Swahili Studies in Japan', "African Urban Studies", Vol. 2, pp. 77-158
- 日野舜也. 1993. 「スワヒリ社会調査法：日本におけるスワヒリ社会研究」・『アフリカ研究：人・ことば・文化』（宮本正興・赤坂賢・日野舜也編）・238-251頁・世界思想社
- 石毛直道. 1968. 「スワヒリ化について」・『アフリカ社会の研究』（今西錦司・梅棹忠夫編）・216-222頁・西村書店
- 和崎洋一. 1977. 『スワヒリの世界にて』・NHKブック
- 和崎洋一. 1988. 「スワヒリ化：サバンナの自己運動」・『中部大学国際関係学部紀要』・4・1-13頁
- 和崎洋一. 1989. 「スワヒリ化：異文化(特にアラブ文化)に対するバントゥの対応について」・『アフリカ研究』・35・65-100頁
- 和崎洋一. 1990. 「スワヒリ化：バントゥのアラブ化について」・『中部大学国際関係学部紀要』・6・1-39頁

コメント

高 谷 好 一

「スワヒリ」というのは、東南アジアで言えば、「マレー」のような印象を持っていたが、話を伺ってずいぶん違うという印象を受けた。マレーはスワヒリに比べるとバラエティが少なく、文化の幅が狭く収まっている。スワヒリは海から来たイスラームの商人が最初の契機になるが、内陸との距離が遠くその到来は時間的にも長引いている。それ故に、結果的には文化的な幅が生じてきたのだろう。東南アジアは山が近く、港に着けば瞬く内に同質化してしまう。「アフリカの巨大な大陸」、「東南アジアの島」という違いを強烈に感じた。そして、スワヒリは「いま生きている」と感じる。とりわけ国民国家を形成する際にも、その混合性そのものが機能している。マレーは接触・混合という傾向はもう死んでしまっているのではないか。あるいはとうの昔にマレーというものが形作られてしまっていて、いまはもう固着している。大陸でいま動いているスワヒリと、多島海で16、7世紀ぐらいに完成され、落ち着いているマレーという違いも強烈に感じさせられた。

この後に続くサヘルや内陸との比較材料のためにも、ここで東南アジアの構造について簡単に触れておきたい。我々は東南アジアを大陸部と島嶼部に分けている。大陸部は南方上座部仏教によって覆われ、島嶼部はイスラームが覆っている。東南アジアをアフリカと対比した場合、強引に言ってしまうと大陸部はサハラやサヘルに近い。もっとも東南アジアの大陸部は砂漠ではない。気候も生業も全く違うのだが、それ以外に歴史という観点からしても、島嶼部と比べると、それよりも早く落ち着いたという印象がある。

島嶼部には「山の民」と「海の民」がいる。「山の民」は山の上の焼き畑民で、やや隔離された生活をしている。それに対して「海の民」は、船が着くところにいる。両者は実際には関係しているのだが、普段は接触の少ないものと考えていい。スワヒリに対するとすれば、それは「海の民」であろうし、それが我々の言う「マレー」である。ところでマレー世界は、スワヒリと同様に交易の場であるが、それと同時に生活の場でもある。

我々が言う「マレー」は、マレー語を話しイスラームを信仰するという二つの要素を持っている。元々は港にあって、混血的なものであっただろうが、マレー語が育ってくる背景の中で、生活者としてのマレーに落ち着いていった。そこにはよほどの長い歴史があったと考えていい。マレーも8世紀以前を考えれば、いまの話のスワヒリと同様の状況だっただろう。その頃の遺

跡の出土品を見ると、サンスクリットの碑文が出ており、明らかにインド人が来ていたのがわかる。それが8世紀頃になると、文字自体はサンスクリットだがローカルな言葉が出現し、島嶼部では古マレー語となる。それらが育って、島嶼部ではマレー語になる。元はと言えばインドの影響があったのが、古マレー語からマレー語が生まれてくるような在地化がある。イスラーム化はそれよりずっと遅れて起こってくる。

東南アジアでのイスラームの拡大は、アラブに近いスマトラ付近が13世紀の終わり頃に始まった。それ以外の島嶼部のイスラーム化は16世紀頃であろう。永きにわたって培われたマレー語圏にイスラームが乗っているマレー世界が形成されたが、それもかなりの長期にわたる過程である。スワヒリの内陸への拡大には時間的なズレが起こっているらしいが、マレーでは周辺への波及は早かった。遠隔地の山の民にまでは到達しなかったが、大部分のところはほぼ同時的に広がったと思われる。

スワヒリ文化では、形成期、定着期、拡大期と分けられているが、東南アジアではそれらが同時に起こっている。スワヒリでは拡大期の植民地時代にヨーロッパが入ってきているが、この時、東南アジアの場合はヨーロッパ人よりも中国人が入ってきている。

また異文化接触の模式図で、バームクーヘンのような図を描かれていたが、これを東南アジアで考えると、少し違う。東南アジアの場合だと、プロト東南アジアの輪があり、インドの輪、その上にイスラームの輪が重なってくる。インドの輪がプロト東南アジアに重なるのが、5、6世紀頃で、イスラームは16世紀頃に重なってくる。そしてかなり遅れて近代ヨーロッパ、あるいは中国が入ってくる。それはあまり重要なものになっていない。プロト東南アジア+インド+イスラームという重なりが、16～17世紀には既に形成され、時間が経つにしたがって、次第に熟成していつている。これが島嶼部である。

「いま生きているスワヒリ文化」が、現在の地域統合で効いていると言っておられる。その部分は東南アジアでは何になるのだろうか。ここには海民としてのマレー人の世界がある。そしてそれは、現代社会の中で極めて上手にアレンジされ、ASEANという形で生きている。ASEANはマレー世界の延長線上にあるものと考えて良い。とすれば、アフリカのスワヒリはASEANに相当するのだろうか。

質疑応答

日野 私も違いが二つばかりあるように思う。一つは東アフリカの場合には伝統的なアフリカ文化とイスラーム、そして西欧という、その三つに単純化できる。インドも入ってきたが、東アフリカに來たインド人はイスラーム教徒が多かったことと、容易に文化が融合しなかったことがある。東南アジアの場合には、インドや中国の文化など、様々なものが重なってきている。

アフリカは全体で千以上もの異なる部族によって形成され、東アフリカだけでも300から400の異なる部族が共生している。都市、あるいは国民という別のレベルでまとまる必要が出てきた時に、スワヒリが格好のモデルになった。マレーシアでの異文化接触は、マレーという一つの文化集団との接触であり、拡大期と定着期が一緒になって起こるような同質性があったのではないか。

一昨年、「世界青年の船」に乗って初めてマラッカ海峡を通ったが、マラッカ海峡からスリランカに行き、モルディブのそばを通過してケニアまで行った。広いという思いと同時に、人間が往き来できないこともないという印象を持った。初めて東南アジアをそういう形で見る事ができて、スワヒリ世界との関わりが構造的に掴めたように思う。

坪内 マレーと言えば、マレーシアと想像するのが当たり前かもしれないが、高谷さんの言う「マレー」は、インドネシアを含み込ん

だ島嶼部全体を指しており、マレー半島、マレーシアはその一部にすぎない。マレー半島だけを考えた場合は、少数民族も少ないが、東南アジアでも言語を200や300は簡単に数えられるような構造を持っている。そこはむしろ共通項で考えた方がいい。

日野 それを超えた共通意識がイスラーム化で起こってきたと考えていいのだろうか。

坪内 イスラームであれ、マレー語であれ、それが共通化していった。その意味でもスワヒリは似ている。

高谷 場所としては島嶼部全体で、フィリピンの南も含めて考えている。

坪内 そういう意識で議論を展開した方がいいだろう。私が興味を持ったのは、スワヒリの基本構造が都市だという点で、東南アジアと対比する時に一つの大きな要素になると思う。都市が相当に昔からあったという話だったが、その事実を確かめておきたい。イスラーム化以前にも、都市が伝統的にあったのだろうか。東南アジアを考える時、確かにマラッカのような都市はある。ある時期には人口が10万人程度あるし、大陸部の方には10万クラスの都市がいくつかある。だが、基本的に東南アジアは都市がないと考えた方がいい。高谷さんの言う港も、人口が1万あれば十分だろう。それを都市と考えるかどうかは別として、日野さんの言う伝統的な都市の大きさをまず把握しておきたい。

東南アジアの場合、都市は港という概念で基本的に理解していいと思う。日野さんの話では都市性という要素は、交わりにくいような本質要素として円の中心部近くに位置している。その位置づけをもう少し理解しておきたい。つまり日野さんは都市を本質として中心部におかれたと思うが、その本質部分が植民地文化との接触では、新市街と旧市街のように分けられ、分かれたままで合体するというような説明があった。東南アジアでは少し違う扱いができるのではないと思う。

日野 東アフリカに伝統的にあった港は、私は都市と考えている。それを都市と考える場合には二つの意識がある。一つは相対的なもので、他にそういう形の社会が全くないところで、交易を主とした町ができた場合は都市にならざるをえない。もう一つは、私の師とする鈴木榮太郎先生の説では、多くの社会的交流の結節的機関ができてくれば都市になる。その意味では人口的な問題ではなく、むしろファンクションとして社会的な様々な接触の機関が成立すれば、それを都市として考えている。スワヒリの港町も、その意味では都市であったと考えている。「アフリカン・シビライゼーション」という本でも、12世紀頃のアフリカにおける都市文化の発祥の場所としてスワヒリの地域を考えている。私もそれはそう間違っていないだろうと思う。

スワヒリ化も植民地化も、その展開は都市から都市、都市から周辺へというルートでし

か考えられない。都市的ではないような、例えばアフリカの伝統的な部族本位制の多部族共生社会の中でセントラリゼーションが起これるとすれば、征服による中心化現象や、あるいは交易による中心化現象で、並列的なところに初めて一種の重層化が起こってくる。その段階ではそこに都市、あるいは都市的機能を想定しなければ議論できないのではないか。スワヒリ文化にしても植民地文化にしても、基本的に周辺へと拡大するその中心的なものは都市だった。都市を通さなければ広がっていかないと考えている。

坪内 都市の機能、都市という考え方は、東南アジアでも全く同じだ。例えば東南アジアの人口1000という小さな集落でも、基本的には港は都市だという理解がある。もう一つ、都市から始まるということだが、都市と混血という並べ方をすれば話はよく合うが、日野さんが書いた図では人種的特性と都市がコアになっている。これは混血をおいているのではない。都市をむしろスワヒリ語よりも下方におき、変化のフロンティアであるという捉え方をしたいようにも思う。

日野 エスニックの部族文化とスワヒリ文化を考えると、対極的にあるものの一つは都市かどうかということだと思う。ただ、エスニック文化の中心に都市的な要素が全くないとは言えない。例えばチーフができて、チーフの周りに伝統的なオフィスができ、ヘッドクォーターができれば、もう都市的な要素が

加わったと考えられないこともない。しかし基本的に対比を考えた時には、スワヒリ文化は都市文化だと言える。

坪内 混血的なスワヒリ文化が都市文化だと理解していいのか。

日野 混血が起こるシチュエーションは、そこが都市的で、アフリカ人も船に乗った人も寄り集まってくる。そのこと自体が都市的と言えるだろう。逆に言えば集散的に文化を作り上げるような混血民ができるのは、伝統的な部族社会の中ではできてこないことであり、やはり都市の場だからこそ成立した。

坪内 人種的特性の Bantu peoples with Arabic or Persian blood というのは、Bantu peoples をあまり強く読んではいけない。むしろ混血的民族と読むべきなのだろう。

日野 そういう形で海岸部が全て混血かどうかは実はわからない。定着期はとうに過ぎ去っており、彼らは外見的には色も黒く、毛も縮れていて、混血民という言い方はできないかもしれない。ただ海岸部の人達には、元々自分達がアラブ世界と結びつきがあり、イスラーム教徒になったという誇りがある。東アフリカの海岸には、「海岸の愚者は内陸の賢者に勝る」という諺があり、内陸を徹底的にバカにしていた。内陸でイスラーム化が起こりスワヒリ意識を持つ人々が海岸の都市に出て来ると、非常に昔の淡い血筋を優越感の拠り所とし「我々はアラブだ」と言い出す。そんなソーシャルダイナミクスも海岸部には

ある。こういうことを捉えることに意味があるのではないかと認識している。

坪内 東南アジアとの対比からいえば、Bantu peoples with Arabic or persian blood を Portugal peoples with … と置き換えたら、全く同じ構造になってくる。構造的には基本的に共通するものがあるという認識で理解できる。

日野 アフリカの文脈で考えたものが、色々な形で共通性を持つと認めて頂ければうれしく思う。

立本 今日と明日とのディスカッションでの比較の単位だが、今回のテーマは、スワヒリ、サヘル、バントゥとある。その時にバントゥはマレーにあたるのか、サヘルはジャワにあたるのか、マラッカ海峡にあたるのか、あるいはその時にスワヒリは何かというような捉え方で議論されるのだろうか。スワヒリだけでも東南アジアと十分比較できるだろう。だが、アフリカと東南アジアを比べるときには、スワヒリはむしろメスティーソ文化、マレー語でいえばプラナカン文化というレベルで比べるべきではないか。マレーと比べるのでは非常に具合が悪い。マレーはバントゥというレベルだろう。

文化としてスワヒリを捉えた時に、なぜスワヒリ文化がアフリカに形成されたのか、なぜ東南アジアではスワヒリ文化のような確固たる混血文化が形成されなかったのかが大きな違いとなる。その違いの一つが、バーム

クーヘンで表せるアフリカとタマネギでしかない東南アジアだろう。部族本位制社会、あるいは部族差異化社会と関わってくるのか。あるいはスワヒリ自体が部族化されているのだろうか。

図の中で、人種的特性であるべき混血を核に持ってくる意味が、もう一つははっきりわからない。本当にそうなのかという疑問と共に、なぜ核に持てこられるのか。歴史的にはスワヒリ化は混血が核になった時から始まっている。形成期、定着期はエクспанションと言われたが、人種的特性が表皮からコアへと転換するのは、果たしていつ頃起こっているのか。

東南アジア、例えばマレーシアでは憲法でマレー人の定義がある。「言語、慣習、宗教」が、「イスラーム教徒で、マレー習慣を身につけ、マレー語を話す」それがマレー人だ。血縁は問題にしていらない。「都市性」を「地縁」と置き換えると、地縁は「マレー国家」という大きな枠組みではある。アフロアジア的スワヒリ人という新しく形成されたものが、スワヒリ文化の核になるというのは、やはりアフリカ的なのだろうか。

日野 これを中核的と言えるかは難しい。人種的特性は一番接触しにくいという意味で図の中心にしている。アフリカの伝統的な人達がこれになるわけにはいかない。都市的なところまでは重なり合う。中核と言うことには問題がある。

スワヒリ文化の形成の歴史を見た時に、最初の混血を前提にして形成された文化のミキシングが特性になっている。ただこれが一番重要だとか、重要でないという意味で構造的に考えたわけではなく、文化接触を考えた場合には、この順序が一番スムーズではないかというものだ。

立本 現在の接触のあり方はそうかもしれないが、初めは人種的な混血から始まっているのではないか。

日野 それは本当に局限された海岸部での問題だ。

立本 言い換えれば、スワヒリ文化形成時には、人種的なミックスが一番コアなのだろうか。

日野 ただこの構造は逆に言えば、操作的な話で、それが例えば人種的な特性が起きたから、スワヒリが起こってきたということではなく、ほとんど同時発生的にある。他の文化との接触で考えた場合は、接触し易いところから、接触し難いところまでということが考えられるのではないかということだ。

松原正毅 スワヒリの形成の始まりとして、アラブイスラームとバントゥ系との接触を初期段階としておくと、他の所でもアラブイスラームとバントゥ系の人々の接触はあったはずだ。西アフリカでも接触はあったが、そこはスワヒリ化現象が出てこない。東アフリカでスワヒリ化現象が出てきたというのは、どう説明されるのか。

日野 ともかくここに来たら数カ月は帰れない。船で来るということは男しかこない。このことが大きいだろう。トリミンガーは、東は男だけが来たが西は家族で来ているという説明をしている。

嶋田 西の方でも似たような現象が起きている。むしろ西の方が顕著かもしれない。

日野 西の方は、ハウサ、マンディンゴ、カヌリ等の社会がそれぞれにイスラームと接触している。それが東アフリカの場合は海岸に局所的に起きているという違いがあると思う。

嶋田 先ほどの議論で、日野さんは人種的特性のところで Bantu peoples with Arabic or persian blood とされているが、むしろ Arabic persian peoples with Bantu blood が正しいだろう。ザンジバルではいまでも大勢のペルシャ人が来ている。マレーの方ではアラビア人等が都市形成のコアになったということはないのか。

立本 アラブ人は来ているが、混血より、アラブ人はアラブ人として尊敬される。

嶋田 混血はありえないのか。

立本 混血はあるが、アラブ人の子孫として尊敬されている。

坪内 マレーが混血かどうかで、意見の対立があるように見えるが、歴史のスパンをどこまでとるかで解決できる。マレー自身の形成が長い時間をかけて行われていることを考えればいい。立本さんの言われたプラナカンのような問題は、スワヒリよりもっと新しい

ある局面が中心になるのではないか。

立本 だがマレーとスワヒリを一緒にして考えるのは問題がある。マレーは厳然として紀元前からリングフランカとしてあった言葉だ。それをアラブ人がきて新しく作られたスワヒリ文化と一緒にするべきではない。イスラーム化の現象を色々な側面から取り上げて議論すべきで、イスラームという要素を別にすれば、日野さんの提示されたスワヒリはあくまでもプラナカン、メスティースだと思う。

田中耕司 アフリカの場合は農耕民や牧畜民など、伝統的な生業が色々あるが、東南アジアと対比するために農業を主体とした社会をとりあげてみたい。マレーには農業や漁撈をする生活があり、このマレー的な生活の中にイスラーム化が起って「マレー世界」が形成されてきた。今日のスワヒリ世界の話の聞くと、バウムクーヘンのような図式でもわかるように、農耕民のままではスワヒリ化できないような構成になっている。ところが、スワヒリ化を仮にイスラーム化という形で対比した時、マレーシアやインドネシアでは農耕民のままでいくらかでもイスラームになりうる。イスラームを信仰すれば、その大きな共通世界に入っていける。スワヒリ化とイスラーム化は別のものとして考えた方がいい。

アフリカの場合、どのような構成要素によって農耕民のスワヒリ化が起きるのか。日野さんの出されたモデルでは、東南アジアの場合にはイスラームが一番外側でもいい。生

業を変えなくてもイスラームの世界を共有できる。逆に言えば、生業自体が東南アジアの海域世界で蓄積されていく。アフリカの伝統的な農業社会は、スワヒリ化の波とは関係なく、境界がはっきりとあるのか、あるいは全く関係のない世界としてあるのか。東南アジアの場合は、農業や漁業という色々な生業が、外からの影響によりダイナミックに変化していく。農耕民も、ずっと同じ農耕民とは言えない。外の世界の様々なインパクトで、農業の方法、生業のあり方自体が変わっていく。スワヒリでは外のものが来ているという印象だけだが、東南アジアでは外から来たものを次々に内在化していく印象が強い。

日野 メスティーソの話から言えば、「スワヒリ文化の形成」は彼ら自身が言っていることではなく、彼らは「アラブになった」と思っている。「文明化する」というのは、スワヒリ語で「ウスタラブ」と言い、アラビア語で「アラブ化する」という意味だ。そして千年以上前の記録に、既にスワヒリ語らしき言葉が出てきている。スワヒリ語の成立からは既に千年以上経っていると考えられ、最近になって突然出てきたものではない。

アフリカの農耕社会のイスラーム化を見ると、例えばトングウェでも、スクマでも、都市に出た若者達がイスラームになる。ブソンドというトングウェの町でも、都市に出た若者はイスラーム教徒だ。チーフだけは出て行かないから、いまでも伝統的な呪術を信仰

している。確かに、その社会の中ではイスラームは外側なのだろう。ただそれがもっと進み、例えばニャムウェジやスクマのように、かなりの人がポーター等で出て行くようになると、住民の大半がイスラームになってくる。

和崎洋一氏が書いていたが、マンゴーラではみんな「自分はスワヒリだ」と認識している。マンゴーラは様々に異なるグループで形成された農耕開拓社会で、そこでの帰属意識は基本的にスワヒリだ。だが例えばスクマという出身地に帰った時、帰属意識は「スクマ」となる。イスラーム教徒ではあっても、出身地に帰ればスワヒリではなくなるらしい。この村落においては、スワヒリとはマデューカーニに住む人、すなわち、バス停留所等の周辺にある何軒かの商店がある市街地に住む人々を指す。この場合、東アフリカにおけるイスラーム化は、スワヒリ化のルートを通して起きている。東アフリカでスワヒリ語を話せない者がイスラーム教徒になることは、極めて例外的なものを除いてはばありえないことだ。

ただし植民地化ではアフリカの文化へのすり寄りがあった。聖書をスワヒリ語や部族語に訳したり、説教するようになった。英語を喋れなくてもキリスト教徒になれる。イスラーム教はアラビア語ができなくても、スワヒリ語ができなければなれない。ただ、農耕民の中にもイスラーム教徒はいる。そこでは必ずしもスワヒリとは言えないが、都市へ出

ていけば都市民となんら変わりはない。都市民としての準備ができています。

家島彦一 東アフリカのスワヒリ・タウンの社会的・文化的構成を見ると、それを全て一括してイスラーム・スワヒリとは言えないのではないかと。もちろん、そこではイスラーム・アラブ意識が非常に強い。しかし、ペルシャ、インド的要素も入ってきているし、宗教ではヒンドゥー教、ユダヤ教やキリスト教もあるというように、非常に多元的複合的要素が含まれている。また、東アフリカ海岸の都市が「スワヒリ」として呼ばれるのは、すでに13世紀末から14世紀の頃である。

東アフリカにおいて、ムスリム農耕民が急増するのは、19～20世紀に入ってからであろう。この時には、ヨーロッパ人によるプランテーション農場の経営と、キリスト教布教とによって、キリスト教も増えるが、同時にムスリム人口も急に増える。プランテーション農場に働く農民の中や開拓農民の間に、都市の農業指導者や宗教的・政治的なリーダーたちを通じてイスラームが入っていく。その力が非常に大きかったと思う。これはおそらく東南アジア、あるいはベンガルなどの開拓地農民の間でも同じような現象がみられた。

もう一つの大きな問題は、東アフリカと東南アジアとの共通点として、歴史的にみると、いずれも大きな政治版図を持った王朝や領域国家が成立しなかったことがある。イスラーム化については、様々な問題が関わっている

と思われるが、西アフリカと東アフリカのイスラーム化の過程を考えてみても大きな違いがあった。西アフリカの場合、サハラ砂漠のオアシス・ルートを通じて、北アフリカのマグリブ地方から直接的に大軍隊でイスラームが入り、イスラームの大帝国を作られた。軍事征服、そして王権が中心となってイスラームを広げたことから、面的に大きな広がりを持った。これに対して、東アフリカは海を通じて外世界とつながりを持ち、しかも島や港をコアとしてイスラームが入っていく。イスラーム化の担い手は、商人であり、スーフィーたちであった。従って、その広がりとは、点と点を線で結ぶネットワークであって、そこにスワヒリ的な要素が強く出てきたと思われる。東南アジアと東アフリカとの共通性もそうした「海域」の共通性に求めてもいいのではないかと。

日野 アフリカプロジェクトの最後の研究会でも、東アフリカの話は東南アジアやインドの人にも共感してもらえた。ところが西アフリカの話は違う。嶋田さんの話が出てきたら、またアフリカ観が変わってくるかもしれない。私は西と東と両方を研究対象にしている。東アフリカのイスラーム化は基本的に個人改宗だ。個人が都市へ出てきてイスラーム教徒になって帰ってくる。ところが西の方は集団改宗で、王やその周辺が改宗し、民衆にも命令する。イスラーム化の展開の違いも大きく影響しているだろう。